

松 山 大 学 論 集
第 22 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 0 年 4 月 発 行

英米文学鳥類考：ミソサザイについて

榊 田 隆 宏

英米文学鳥類考：ミソサザイについて

榊 田 隆 宏

1

「日本で一番小さな鳥」¹⁾ と言えば、キクイタダキである。ヒタキ科のウグイス亜科に属し、漢字は菊戴、全長約 10cm。何しろスズメ（全長約 14.5cm）²⁾ の 3 分の 2 ぐらいしかない。英名は **goldcrest** で、文字通りの意味は「金色の鳥冠」。英国でも「最も小さい鳥として有名」³⁾ だ。でも、このキクイタダキを筆頭とする「最小クラスの鳥」の中で、日・英を問わず最も有名なのはミソサザイである。ミソサザイ科に属し、英名は **wren**、漢字は鷦鷯、全長約 10.5cm。というのも、この小鳥は見た目のサイズは勿論のこと、鳴き声の点で群を抜いて目立つからである。それかあらぬか、古の英国では、見た目や習性でミソサザイに良く似た小型の野鳥をミソサザイ族の範疇に入れていたようである。研究社の『英語歳時記』は次のように述べている。

古く **fire-crested wren** と呼ばれていたのは **firecrest** [マミジロキクイタダキ] で、目の辺に白いしまを持ち、**goldencrested wren** と呼ばれたものは **goldcrest** [キクイタダキ] で、オレンジ色の冠毛を持ち、**willow wren** と呼ばれたものは **willow warbler** [キタヤナギムシクイ] で、ウグイス科の **chiffchaff** (ムシクイ) に似ており、**wood wren** と呼ばれたものは **wood warbler** [モリムシクイ] で、灌木地帯に住み 2 種類の鳴き方をする⁴⁾

このように《分家》が出来るほど、ミソサザイは英国では別格の鳥である。

それというのも、英国人には極めて身近な鳥で、しかも誰からも愛される美声の鳴鳥だからである。ギルバート・ホワイトは「胸赤のロビンとミソサザイは、人家へよく来る。冬には離れ家〔納屋・馬小屋・鳥小屋・薪小屋など〕へよく来る」と述べている。でも我が国では、山地を除けば、一般庶民が普段この鳥を目にする機会は皆無に近く、とても人口に膾炙しているとは言い難い。

というのも、我が国のミソサザイは「夏（8月）の高原の鳥」⁵⁾であり、その住み処は「山岳の急斜面、沢筋、溪谷など、苔むした岩が折り重なり、木の根がはり、倒木の多い、地表面の複雑な樹林下」⁶⁾だからである。中西悟堂氏もミソサザイを「奥深い溪谷」⁷⁾の鳥と述べている。どうりで一般庶民に無縁なのも無理はない。したがって、最初に、専門家の解説を仰ぎながら、ミソサザイの輪郭を明らかにすることから話を始めたい。筆者の愛用する『野鳥ガイドブック』は、この鳥について次のように述べている。

ポイント 日本で最小の鳥の一種。褐色で丸い体には、黒い横斑^{おうはん}がある。尾を立てた姿勢で、大きく美しい声でさえずる。

特徴 体長約 10.5cm。体は、褐色で丸く、尾は短い。嘴は細くまっすぐ。体と翼は褐色で、黒い横斑^{かいこくしよく}や灰白色の斑点が複雑にまじる。眉斑^{びはん}は淡黄^{たんおう}褐色^{かつしよく}で細い。伊豆諸島南部、対馬・九州、屋久島には、それぞれ別亜種の、モスケミソサザイ、ツシマミソサザイ、オガワミソサザイがいるが、南のものほど体色が濃くなる……**鳴き声**は、地鳴きがチャッチャツで、さえずりは複雑で大声。ツリリリとふるえる。

生態 種子島以北の山地に生息し留鳥。山地の、溪流沿いや湿った林で繁殖。雄は、なわばり内に複数の巣をかけ、複数の雌に雛^{ひな}をかえさせることもあるという。冬は低地にも来る。

豆知識 みそぬすびと、みそちんちん、やぶくぐりなどは、みなミソサザイの地方名である。このほかにもせっちんどりなど、地方名の多い種である。山里に多く、小さな体なのに大きな声で鳴くので親しまれているから

だろう⁸⁾

ミソサザイの学名はギリシャ語で *Troglodytidae* であるが、その意味は「穴の中で生活する」⁹⁾ である。事実、この鳥は「巣を作るためか、あるいは眠るためか、ともかく壁や岩や木の穴を盛んに捜しまわる」¹⁰⁾ という。ちなみに、和名のミソサザイの語源については、吉田金彦編著『語源辞典：動物編』に以下のような詳しい解説がある。

ミソについては、ヒソ（竊）の義（名言通）という説もあるが『下学集』に「此鳥栖_レ溝三歳、故呼_二溝三歳_一」とあるように、人家の溝付近に生息することから、ミゾ（溝）の意であろう。ミゾは田などで水を流すために掘り通した細長い窪みで、『古事記』では埋溝を「美曾宇女」とよんでいるし、『和名抄』にも「田間之水曰_レ溝 美曾」とある。ミヅソヒ（水添）→ミソヒ→ミソ→ミゾ（溝）。このミソ（ゾ）がサザイの上に加わった。サザイは、古名ササキ・サザキのイ音便（松屋筆記・大言海）に間違いはない。ササキ・サザキは、『東雅』もササが小さい意でキを小鳥を示す接尾語、小さい鳥の意とあり、『日本釈名』は「サザイとはささやかなる意、小さき也」ともいう。ササは、ササゴイのササと同じく小さいの意、キはトキ・サギなどのキで鳥を意味する接尾語というのが穏当。サザイがつく鳥の名には、他にオホサザイ（カヤクグリ）・シホサザイ（ヤブサメ）などがある¹¹⁾

次に、英語版の『野と森の鳥』でミソサザイの解説を見てみよう。

The wren

The diminutive wren, though sometimes referred to ungraciously as *Stumpy Dick* and such names, has from earliest times been held sacred, and

supposed to be a bringer of good fortune.

It is a short, plump bird with a tinny, upturned tail, reddish-brown above, paler beneath, barred dark brown all over, with a light stripe over the eye. It is an active, though secretive bird, always on the move, and curiously mouse-like as it scuttles about in the hedges and bushes, or along the base of a wall. The song of the male is heard all year round, a vigorous, clear and brilliant melody, remarkably loud for a bird of its size.

The nest, built in any cavity in a hedge, tree, bush, wall or thatch, or in that of a larger bird, is subtly camouflaged, dome-shaped and feather-lined, with a tiny side entrance. There are five or more eggs, white, speckled red, and there may be two or three broods.¹²⁾

(チビ鳥のミソサザイは、時には失礼にも「ズングリ太郎」とか、それに類した名前と呼ばれることがあるにせよ、太古の昔から神聖にして、幸運をもたらす鳥と見なされてきた。

体は小さくズングリ型で、短い尾を常に上げている。上面は赤褐色で下面はやや淡く、全身に暗褐色の横縞がある。目の上の縞は色が淡い。人目を避ける鳥だが、活動的で常に動いている。不思議なことに、生垣や灌木の中、それに壁の最下部を小走りに動き回る時には、ハツカネズミのように見える。雄の囀りは1年中聞かれ、快活で、澄んだ、明るい調べを体に似合わない程の大きな声で奏でる。

営巣場所は生垣、樹木、灌木、壁、草葺き屋根などの空洞、それに自分よりも大きな鳥の巣穴など。巣は巧妙にカモフラージュされ、側面に小さな入口のある球形で、中は羽毛で内張りされている。一腹の卵の数は5個以上。その色は白や斑点のある赤。孵るのは2、3羽というところか。)

2

以上要約すれば、ミソサザイとは、①最小クラスの鳥の一種；②ズングリした体型で短い尾を立て常に動いている；③体と翼は褐色で全身に横縞がある；④小さな体に似合わず大きな声で囀る鳴鳥（英国では1年中聞かれる）；⑤英

国では人気のある身近な鳥で聖鳥にして吉鳥，となろうか。これでミソサザイの輪郭は凡そ明らかとなった。でも，今一つ見落としてはならない重要な点がある。ミソサザイの「一夫多妻」である。この点について，国松俊英氏は実に分かり易い文章で次のように述べている。

この鳥は一夫多妻である。オスは植生や洞穴の中などに巣の外側をつくる。球形の巣で，屋根があつて横に入り口がつくられている。オスは毎朝さえずって，メスの気をひくのだ。そしてメスがなわばりに入ってくると，巣のほうに誘っていき求愛する。メスが気に入ると，残った巣づくりをいっしょにやって交尾をする。その後メスは，獣の毛や羽毛を使って産座をつくり，卵を産む。抱卵やひなに対する給餌などは，ぜんぶメスがやる。オスは巣をメスにまかせたあとは，ほとんど巣に来ることはなく，はなれた場所でさえずりながら見守るだけだ。さえずりと巣をつくるのがうまいオスは，数羽のメスに気に入られて結婚する。ただし歌も下手くそで巣づくりもだめなオスは，結婚できないとか。鳥の世界も人間の世界も，力のないオスにはたいそう厳しいのだ¹³⁾

「一夫多妻」のミソサザイに関しては、『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』に詳細な解説がある。長くはなるが，ここで紹介したい。

雄はそれぞれにテリトリー（縄張り）を持ち，繁殖期には陽気にさえずりながら，この領内にいくつもの巣を続けざまにつくる。しかし，どの巣も決して完成はさせず，外壁をざっとつくっておくだけだ。雌がテリトリーに入ってくると，雄は激しい興奮状態におちいり，自分のつくった巣のどれかに出たり入ったりして，まったく落ちつかない。つばさをだらりと垂れて，尾を激しくふるわせ，まさに躁^{そうきょうせい}狂性精神病者を思わせる。

まもなく歌の調子が変わってきて，興奮状態が高まるとともに歌はだん

だんと弱まっていく。雌が雄の誘いに応じれば、めでたくつがい誕生となる。雌は気に入った巣の内部でせっせとその仕上げにかかる……

ミソサザイはふつう年2回産卵する。1回目は4月の末ごろ、2回目は6月中旬ごろである。1腹の卵数は5～8個。卵は比較的大きく丸みをもっている。殻は白色で、赤っぽい小さな斑点がある。抱卵は雌だけがする。雄は、いったん交尾がすむと完全に雌を捨ててしまうからである。ミソサザイの雄は、どうにもならない浮気者で、一夫多妻主義者である。

新しい相手を求めて飛びさった雄は、まもなく次の相手を見つけて、すでに用意してある巣のひとつを提供する。その巣が、最初の“愛の巣”のすぐ近くというわけである。

雌は13～16日間抱卵する。孵化したひなは飛べるようになって、まだ巣立ちしないで、長期間巣にとどまり、成鳥になって完全にひとり立ちしてから、生まれた巣にもどってくることがよくあるといわれる。

ミソサザイは、カッコウから^{たくらん}托卵されることが非常に多い。

この鳥は、四季を通じて歌声を聞かせてくれる数少ない鳥の一つである。春には徹底した個人主義であるが、厳寒期には、多少は仲間たちと近づきになるらしい。数羽のミソサザイが身を寄せあって、厳寒の夜長を耐えている姿がときに見られる。こうすることで、個々の抵抗力が強まり、凍死せずにすむのであろう¹⁴⁾

と見てくれば、「鳥たちのほとんどは一夫一妻の婚姻形態を持つ」¹⁵⁾のに対して、ミソサザイの雄は「徹底した一夫多妻主義者」¹⁶⁾であることが判明する。具体的に言えば、「どの雄も繁殖期ごとに3～12個の巣をつくり近くの雌に次々とプロポーズする」¹⁷⁾という。でも、これは「ミソサザイは、カッコウから托卵されることが非常に多い」という実に厭うべき自然の摂理と無縁ではあるまい。

というのも、托卵とは「ある鳥が他種の鳥の巣に産卵し、その鳥に抱卵・育

雛させること」¹⁸⁾であり、托卵鳥の雛は「仮親の卵より早く孵化し、仮親の卵を巢外に排除する」¹⁹⁾ ために、被害鳥は子孫を皆殺しにされるという悲惨な結果になるからだ。この托卵による種としての絶滅を避けるために、ミソサザイの雄は否が応でも「徹底した一夫多妻主義者」に成らざるを得なくなったのではあるまいか。そう言えるのも、ホトトギスに托卵されることの多いウグイスもまた「一夫多妻主義者」であるからだ。だとすると、羨ましい所か、ただただ同情する他はない。

では、英国の博物学者たちは、ミソサザイをどう見ているのであろうか。最初に、ギルバート・ホワイトは『セルボーンの博物誌』の中で次のように述べている。

- ① 「ミソサザイは、厳寒期を除いて、冬中歌う。」 (“Wrens sing all the winter through, frost excepted.”)²⁰⁾
- ② 「胸赤のロビンとミソサザイは人家へよく来る。冬には離れ屋〔納屋・馬小屋・鳥小屋・薪小屋など〕へよく来る。餌はクモ。」 (“These [red-breast and wren] frequent houses ; and haunt outbuildings in the winter ; eat spiders”)²¹⁾
- ③ 「ロビンとミソサザイは、特にミソサザイは、寒さの厳しい日を除いて1年中鳴いていることは、どんな不注意な観察者にもよく知られています。」 (“As to the red-breast and wren, it is well known to the most incurious observer that they whistle the year round, hard frost excepted ; especially the latter.”)²²⁾

ホワイトが力説しているのは「ミソサザイは、ロビンと共に、英国人には身近な野鳥で、しかも1年中鳴いている」という点である。では次に、今一人の

著名な博物学者 W. H. ハドソンのミソサザイ観について見てみよう。彼は『ロンドンの鳥』(*Birds in London*) [1897] の中で次のように述べている。

He [wren] is a delightful little bird, a very general favourite, and is a winter singer, with a bright, beautiful, lyrical song, wonderfully loud for so tiny a creature. I was never more impressed with the loudness of its song than on one Sunday afternoon in the spring of 1897 in Battersea Park. I was walking with the park superintendent round the lake, listening for some new summer voice, but for some time no bird sound reached us. Fifty or sixty boats full of noisy rowers were on the water, and the walks were thronged with loudly talking and laughing people, their numberless feet tramping on the gravel paths producing a sound like that of a steam roller. My companion exclaimed impatiently that it was impossible to hear a bird-note in so much noise. He had scarcely spoken before a wren, quite fifty yards away, somewhere on the island opposite to us, burst out singing, and his bright lyric rang forth loud and clear and perfect above all that noise of the holiday crowd.²³⁾

(ミソサザイは楽しい鳥で、誰にも愛され、冬でも明るい美しい旋律の歌を囀る小鳥である。その声は、あの小さな体でと驚くほど大きい。私がその声の大きさに驚嘆したのは、1897年春のある日曜日の午後、バッテリー公園でのことであった。私は公園の管理人と一緒に池の周りを歩いて、夏鳥で新たに渡ってきたものの声が聞こえないかと耳を澄ましていた。しかし、暫くの間は、鳥の声など全く聞こえなかった。池の中には、5、60艘のボートが騒がしい漕ぎ手をのせて浮かんでいた。公園の道は、大声でしゃべったり笑ったりする人々で雑踏していた。その人々が砂利道を踏みならす音は、道路をならすローラー車のような音をたてていた。私の連れは、こんな騒々しい所で鳥の声を聞くんて不可能だといらいらして言った。ところがその直後、1羽のミソサザイが、我々のいる反対側の島のどこかの、50ヤードはたっぷり離れたところで、突然歌い始

めた。その輝かしいばかりの音楽的な囀りは、日曜日の雑踏の喧噪など完全に圧して、大きく明澄に鳴りわたったのだ。) ²⁴⁾

ここで W. H. ハドソンが強調しているのは、ミソサザイの体に似合わない声の大きさである。それというのも、「冬でも明るい美しい旋律の歌を囀る」ミソサザイは、英国では人気度ナンバーワンの「国鳥」ロビンと並んで、国民的アイドルとも言えるべき有名鳥だからである。だとすると、英国の文人たちがこの鳥に着目しない筈がない。次に、英文学に登場するミソサザイについて見てみよう。

3

最初に、シェイクスピアから wren の登場する場面を順次見てみる。

- ①『シンベリン』（4幕2場）：身内の^{なきがら}亡骸を見てイモーゼンは嘆く。

I tremble stiff with fear : but if there be
Yet left in heaven as small a drop of pity
As a wren's eye, fear'd gods, a part of it !

「ああ、こわい、ふるえがとまらない。神々よ、もし天に
ミソサザイの涙ほどのあわれみが残っておりますなら、
その半^{はんしずく}滴でも！」 ²⁵⁾

- ②『ヴェニスの商人』（5幕1場）：ポーシャは侍女のネリッサに言う。

The crow doth sing as sweetly as the lark,
When neither is attended, and I think
The nightingale, if she should sing by day,
When every goose is cackling, would be thought
No better a musician than the wren.

「まわりになににもなければ、カラスだってヒバリのように

美しく歌うと聞こえるかもしれないわ、逆に
 ナイチンゲールだって、ガチョウたちがうるさくわめく
 昼ひなかに歌えば、せいぜいミソサザイ [キクイタダキ] 程度の
 歌い手としか思われないでしょう。』²⁶⁾

③『夏の夜の夢』（3幕1場）：機屋^{はたや}のボトムは歌う。

The ousel cock so black of hue,
 With orange-tawny bill,
 The throstle with his note so true,
 The wren with little quill, --²⁷⁾

「色真黒でくちばしは
 焦げ茶色した黒ツグミ、
 歌の上手な歌ツグミ、
 か細い喉のミソサザイ——」²⁸⁾

④『ペリクリーズ』（4幕3場）：タルソ太守の妻ダイオナイザは臆病者の
 夫を責める。

Be one of those that think
 The petty wrens of Tarsus will fly hence,
 And open this to Pericles. I do shame
 To think of what a noble strain you are,
 And of how coward a spirit.

「ではあなたも、
 タルソのミソサザイが飛んで行ってペリクリーズに
 告げ口するだろう、などと考える手合いの
 仲間になりなさい。恥ずかしいったらありやしない、
 高貴な生まれのくせにこんなに臆病とは。」²⁹⁾

⑤『十二夜』（3幕2場）：サー・トービーが姪の侍女を評して言う。

Look, where the youngest wren of nine comes.

「見ろよ、みそさざいの中でも一番のチビってのが飛んできた。」³⁰⁾

⑥『ヘンリー六世・第二部』（3幕2場）：王は臣下のサフォーク公に反論して言う。

Came he right now to sing a raven's note,
Whose dismal tune bereft my vital powers ;
And thinks he that the chirping of a wren,
By crying comfort from a hollow breast,
Can chase away the first-conceived sound ?

「たったいま、入ってくるなり不吉なカラスの声で鳴き立てて、
この五体から生命力を根こそぎ奪っておきながら、
今度はミソサザイの黄色い声を張りあげて、
しっかりしろなどと心にもない励ましをさえずるのか？
それで最初に聞いた不吉な声が消えるとでも思うのか？」³¹⁾

⑦『リチャード三世』（1幕3場）：グロスター公は王妃に嘆いて言う。

I cannot tell : the world is grown so bad,
That wrens make prey where eagles dare not perch ;

「それはどうですか。とにかくいまの世のなかは
ひどいものだ、鶯も羽根を休めることをためらう高みで
ミソサザイが餌をあさっている」³²⁾

⑧『リア王』（4幕6場）：リア王はグロスター伯爵に言う。

When I do stare, see how the subject quakes.
I pardon that man's life. What was thy cause ? Adultery ?
Thou shalt not die : die for adultery ! No :

The wren goes to 't, and the small gilded fly
Does lecher in my sight.

「わしがにらみつけば、臣下どもはふるえあがる。

その男のいのちは許す。おまえの罪状はなんだ？

姦通か？

死刑にはせぬ。姦通罪で死刑！ ばかな。

ミソサザイもやっておる、金蠅などはわしの目の前で

平然と番^{つが}いおる。』³³⁾

⑨『マクベス』（4幕2場）：マクダフ夫人は夫の逃亡を臣下に嘆く。

Wisdom! to leave his wife, to leave his babes,

His mansion and his titles in a place

From whence himself does fly? He loves us not;

He wants the natural touch: for the poor wren,

The most diminutive of birds, will fight,

Her young ones in her nest, against the owl.

「賢明な判断ですって！ 妻子を捨て、

家^{いえやしき} 邸から財産まで置き去りにして逃げ出すのが？

いいえ、あの人は私たちを愛してはいないのです。

親子の情愛がないのです。小鳥のなかでいちばん小さい

ミソサザイ [キクイタダキ] さえ、巣のなかの雛を守るためなら

フクロウにもむかっていくではありませんか。』³⁴⁾

と見てくれば、シェイクスピアにとって wren の評価は一般に低いようである。それというのも、彼はこの鳥の《見た目の小ささ、貧弱さ》に最大の力点を置いているからである。「小鳥の中でいちばん小さい」、「一番のチビ」、「ミソサザイの涙」等は、その証左である。「黄色い声」とはまるで子供（幼鳥）扱いである。このように《半人前扱い》であるからこそ、歌手としての評価も

「せいぜいミソサザイ程度」と低いものとなる。とはいえ、これではどうも合点がゆかない。いやしくもミソサザイは、見た目だけではなく、鳴き鳥としても一際目立つ名鳥である。果たしてシェイクスピアの言う wren とは本当にミソサザイのことなのか。

古くはククイタダキも wren の範疇に入れて呼んでいたことは既に見たが、シェイクスピアの作品中にも goldcrest (ククイタダキ) の語は見当たらない。ここで研究社の『新英和大辞典』を紐解いてみると、wren の意味として「1. ミソサザイ；2. ミソサザイに似た各種の鳴鳥《特に、ヨーロッパ産のヨーロッパヨシキリ (reed warbler), キタヤナギムシクイ (willow warbler), ククイタダキ (goldcrest) など》」³⁵⁾とあり、また OED は、上記の2の定義よりも更に一步踏み込み、「特にククイタダキを指す」と明記している：「2. a. Applied, esp. with distinguished term, to various other small birds of the family Troglodytidae [注：ミソサザイ科] or Sylviidae [注：ウグイス亜科], resembling the common wren in appearance or habits ; esp. the gold-crest (*Regulus cristatus*)³⁶⁾」。

以上の点から考えて、もしシェイクスピアの言う wren が「ククイタダキ」をも意味するとするなら、「せいぜい wren 程度の歌い手」とか「鳥類の中で一番小さい」という内容も合点が行くが、いかがなものであろうか。

この《見た目の小ささ、貧弱さ》に次いで、シェイクスピアが注目している wren の特性は「姦通罪」と「勇気」である。最初の「姦通罪」については、wren がミソサザイとするなら、既に見た「ミソサザイの雄＝どうにもならない浮気者で、一夫多妻主義者」を見れば素直に首肯できる。次に、wren の「勇気」について考えてみる。シェイクスピアは「巣の中の雛を守るためならフクロウにもむかっていく」と述べている。が、ジェイムズ・E. ハーティングは『シェイクスピアの鳥類学』の中で「雛を守るため猛禽と闘う勇気が十分あるということ、それは疑わしい」³⁷⁾ (“the wren has sufficient courage to fight against a bird of prey in defence of its young, which is doubtful.”)³⁸⁾と疑問を呈している。果たしてどちらが正しいのか。順を追って考えてみたい。

先ず、「この上なく小さな、したがってこの上なく弱い鳥」³⁹⁾という常識的見方は、鳥類に関しては間違いである。否、それどころか、その正反対である。野鳥の習性や生態に精通した博物学者のギルバート・ホワイトは、『セルボーンの博物誌』の中で「鳥類は、たいてい、大体その身体の大きさに比例して、驚き易く臆病のようです」⁴⁰⁾ (Most kinds of birds seem to me be wild and shy somewhat in proportion to their bulk)⁴¹⁾と述べて、「小型の鳥＝大胆」の代表例として英国最小の鳥キクイタダキ (golden-crested wren) を挙げている。したがって、上記⑨の《「小鳥の中で一番小さい wren」＝キクイタダキ》と解するのなら、マクダフ夫人の台詞に何の疑義も生じないが、《wren の本家》、大本のミソサザイについて今少し詳しく見てみよう。

キクイタダキよりも更に小型で、鳥類最小と言われるハチドリは、「なにしろ鳥の中でも極小ながら、見掛けによらず、やることが大胆で向こう見ず。喧嘩好きときている。カラス、タカはいうに及ばず、時には獣にも果敢に戦いを挑んでゆく」⁴²⁾という。と見てくれば、チビ鳥のミソサザイが見た目とは裏腹に剛胆な気質を有し、いざ我が子を守るためとあらば、「猛禽と闘う勇気が十分ある」ことは想像に難くない。それが証拠にアト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』は、ミソサザイにまつわるイメージ・シンボルの一つとして「母性愛、勇敢を表す」⁴³⁾ (maternity, heroism)⁴⁴⁾と記している。「焼野きざすの雉よる夜の鶴」は、何もキジやツルに限ったことではあるまい。

次に、民話を見てみると、洋の東西を問わず、ミソサザイが猛獣や猛禽に打ち勝ち、《この上なく小さな、したがってこの上なく強い鳥》を示す話には事欠かない。それも道理。何しろ西洋の伝説によれば、ミソサザイとは「鳥の王者」(“the king of all birds”)なのだから。この点に関して『イソップ寓話集』の「ワシとミソサザイ」(‘The eagle and the wren’)は、「イソップの鷯鷯は鷯の肩に運ばれていたが、突如飛びおりて、先にゴールを切った」⁴⁵⁾ (“Aesop’s wren was carried along on the shoulders of the eagle; then all of a sudden he flew off and beat the eagle to the finish line.”)⁴⁶⁾と述べている。詳しくは以下の如し。

あるとき鳥たちが集まって、もっとも高く飛べた者を自分たちの王者と見なし、冠を授けることにした。そのときワシは太陽にまで昇ってゆき、戻ってくると自分の勝利を宣言した。ところがミソサザイはワシのくびにとまって太陽まで昇り、頂点に達するとワシより高く跳ね上がっていたのだ！ そこで王冠はミソサザイのものとなり、鳥の王と認められた⁴⁷⁾

この伝説を踏まえたものが、上の⑦で見た『リチャード三世』（1幕3場）でグロスター公が言う台詞である。口承文芸で「ミソサザイは鳥の王である」という話は、何も西洋の専売特許ではない。我が国の昔話にもある。その内容は以下の如し。

ある時、ツルとミソバサミ（ミソサザイ）は、朝日はどっちの方角から上がるかというカケをした。ツルはいばってこっちからだといい、西を向いた。ミソバサミは、どっちだべと、きろきよろしていた。そのうち日がさしてくると、ミソバサミはさっと東を向いた。そしてこっちの方から上がるといった。それでツルは負けて、ミソバサミは鳥たちの王様になったのである。また別の昔話で、鳥たちがご馳走をする競争をした時、ミソサザイはイノシシをたおしてワシに勝った。ここでも鳥の王になったという⁴⁸⁾

このように、洋の東西を問わず、ミソサザイが「鳥の王」とするなら、たとえ見た目は「チビ」でも喧嘩や戦いに強いのは当たり前だ。それが証拠に、ドイツの民話：「ミソサザイと熊の戦い」⁴⁹⁾では大熊を、またカナダの民話：「ミソサザイのごちそう」⁵⁰⁾ではオオカミを、ミソサザイが手玉に取って、討ち滅ぼす話がある。これに類した民話は我が国にもある。「みぞさざい 鷺鷥と鷹の仲間」である。参考のため、以下紹介する。

大昔色々の鷹が集まって酒盛りをしている所へ、小さな鷓鴣が遣って来て、僕も仲間に入れて下さいと言ったそうです。鷹の同勢はこれをばかにして、この仲間に入りたければ猪を捕^{いのしし}って来るがいい。猪を捕って来たら酒盛りに加えてやろうと言いました。そうすると鷓鴣はすぐに飛んで行って、藪^{やぶ}の中に寝ている猪の耳の中に飛びこみました。猪はびっくりして駆け出しましたが、小さな鷓鴣が耳の中であばれるので、苦しくてたまらぬから夢中になって狂いまわり、とうとう岩の角に頭をぶっつけて死んでしまいました。それで大威張りで帰って来て、鷹の仲間に入って酒盛りをしたそうであります。この時に熊鷹という大きな鷹が、負けぬ気になって、飛び出して行ったところが、猪が二匹つれ立って走っていました。それを一ぺんに二つ共捕ろうと思って、右と左との足を一匹ずつ掛けたら、猪が両方へ遁^にげて行こうとした為に、欲^{よく}深^{ふか}の熊鷹^{また}の股が裂けてしまったという話もあります。(播磨)⁵¹⁾

と見てくれば、ミソサザイとは「山椒は小粒でもびりりと辛い」所の話ではない。見た目は「この上なく小さな」鳥ながら、いざ敵に回すと、どでかい猛獣や猛禽ですら命が危ない程の《勇猛果敢》であることが分かる。換言すれば、ミソサザイは「知恵と力と幸運を持った鳥」⁵²⁾なのだ。この小鳥が英国では古来「幸運をもたらす鳥」と見なされてきたことは既に見たが、それは我が国と同様である。この点については後に日本神話の項で触れたい。

ここで英国人なら、『マクベス』（4幕2場）に登場する wren とはミソサザイではなく、キクイタダキではないのか、などと茶々を入れるのはヤボなのかもしれない。というのも、古くはキクイタダキもミソサザイ一族の鳥と見なされていたのだから。この混同・混乱は我が国の英学にも影を落としているようである。それは、昭和8年に出た古書：『英文学風物詩』による wren の解説：「ミソサザイの類である。此の鳥を古人が“king of all birds”などと呼んだのは頭上に金冠を頂くからで、folklore では此の鳥は鷲に苦手として扱われてい

る」⁵³⁾を見れば一目瞭然である。既に見たように、「鳥の王」とはミソサザイ、「頭上に金冠を頂く」のはキクイタダキ、この両者の中でワシと関わるのは前者である。では次に、英詩に登場するミソサザイについて見てみよう。

4

最初に、John Webster から。この劇作家は *The White Devil* の中でミソサザイに言及して次のように述べている。

Call for the robin redbreast, and the wren,
Since o'er shady groves they hover,
And with leaves and flowers do cover
The friendless bodies of unburied men.⁵⁴⁾

(胸赤のロビンとミソサザイを呼ぶがいい
あの鳥たちは薄暗い森を舞い飛んでは
知るべのない野ざらしの亡骸を
草木の葉や花で埋めてくれるから。)

これは「これらの3羽の鳥（ロビン、ミソサザイ、ツバメ）は他のどの鳥にもまして……不思議な力や宗教的迷信を持っています」⁵⁵⁾ という民間伝承を踏まえたものである。次に、桂冠詩人のドライデン (John Dryden [1631-1700]) は「全ては恋のために」(‘All for Love’) の中でミソサザイに言及して次のように言う。

Fool that I was, upon my eagle's wings
I bore this wren, till I was tired with soaring,
And now he mounts above me.⁵⁶⁾

(自分は何という愚か者なのか
このミソサザイを我がワシの翼でヘトヘトになるまで運んだあげく、

今や奴が自分よりも空高く舞うとは。)

これは言う迄もなくミソサザイが「鳥の王」となった西洋の伝説に基づいて
いる。では第3に、ウィリアム・ブレイクから二つの詩を見てみよう。

①He who shall hurt the little wren
Shall never be beloved by men.
He who the ox to wrath has mov'd
Shall never be by woman lov'd.⁵⁷⁾

(小さなミソサザイに危害を加える者は
決して人には好かれない。
雄牛を怒らせる者は
決して女性には愛されない。)

②And can He who smiles on all
Hear the wren with sorrows small,
Hear the small bird's grief and care,
Hear the woes that infants bear...

And not sit beside the nest,
Pouring pity in their breast,
And not sit the cradle near,
Weeping tear on infant's tear?

And not sit both night and day,
Wiping all our tears away?
O no! never can it be!
Never, never can it be!⁵⁸⁾

「すべてのものに ほほえみたもう主^{しゆ}が

小さなみそさざいの悲しみを聞きながら
小さな鳥の憂いとわずらいを聞きながら
おさなごの耐えしの悩みを聞きながら

鳥の巢の そばに座って
かれらの胸に 憐れみをそそぐこともなく
また ゆりかごの近くに座って
おさなごの涙を 涙で濡らすこともなく

また 夜となく 昼となく座って
われらの涙を 拭い去らずにいられるか？
おお！ いな 決して できはしない！
決して 決して できはしない！」⁵⁹⁾

上の二つの詩に共通するものは、先ず何よりも「ミソサザイ＝この上なく小さな、したがって、この上なく弱い鳥」というイメージである。それは「小さなみそさざいの悲しみ」、「小さな鳥の憂いとわずらい」、それに「小さなミソサザイ」と並列して用いられている「おさなごの耐えしの悩み」、「おさなごの涙」という言葉を見れば明らかである。このミソサザイが、英国では「太古の昔から神聖にして、幸運をもたらす鳥と見なされてきた」とするなら、「危害を加えてはならない」という詩人の警告は尤もである。

でも、ここで一つ気になるのは、Wrenning Day (12月26日)の風習である。というのも、この日には「ミソサザイに石を投げて殺す習慣があった」からである。とはいえ、「太古の昔から神聖にして、幸運をもたらす鳥と見なされてきた」ミソサザイである。それを何故に敢えて殺すのか。合点がゆかないのは誰しも同じである。先ず Wrenning Day から見てみる。これについて、『ブルーワー英語故事成語大辞典』は次のように述べている。

Wrenning Day＝「聖ステパノ（ステファナ）の日。St. Stephen's Day（12月26日）。聖ステパノはキリスト教会最初の殉教者で、投石によって殺された。この聖人を記念する聖ステパノの日が以前は Wrenning Day と呼ばれていた。これは、ある地方でこの日、村人が聖ステパノの殉教を記念しミソサザイに石を投げて殺す習慣があったことに由来する。⁶⁰⁾

では聖ステパノの日に、よりによって瑞鳥のミソサザイを何故に殺めるのか。その理解し難い理由と背景について、加藤憲市氏は『英文学動物話』の中で次のように述べている。

ケルト族にはじめて伝道した初期の伝道師たちは、この小さな鳥への土民の信仰が伝道を妨げると考えて、クリスマスにミソサザイを捕殺せよと命じました。で、アイルランドの子供たちは、スティーヴン上人の日（St. Stephen's Day, 12月26日）に、捕らえたミソサザイをハリエニシダ（furze）にしぼりつけ、次の歌をうたって村をねりあるいて、小銭をもらい集める風習がありました。

The wren, the wren, the king of the birds,
St. Stephen's Day was killed in the furze ;
Although he be little his honour is great,
And so, good people, pray give us a treat.

（鳥の王者ミソサザイ、
スティーヴン上人の日にハリエニシダで殺された。
小さい鳥だが、えらい鳥。
だから皆さん、お恵みを。）⁶¹⁾

古のアイルランドで初期の伝道師たちがミソサザイを殊更に敵視したのは、この鳥をケルト族が「ドルイドの聖鳥」⁶²⁾として敬っていたからである。平凡社の『世界大百科事典』によれば、ドルイドとは「古代のケルト人の信仰をつ

かさどった聖職者、司祭階級」のことで、「貴族層に属し、公私の神事、犠牲、裁判、占星、民衆の教化などをつかさどり、絶大な権威を有した。ケルト人は靈魂の不滅を信じ、動植物の姿をとる神々を崇拝、泉や森、とくにヤドリギ、オークを神聖視し、犠牲をささげ占いをおこなった。こうした宗教を指導・教化したのが、ケルト語で元来くオークの木を知っている人々を意味したドルイドであった」⁶³⁾という。「鳥の王者」にせよ、また「ドルイドの聖鳥」にせよ、ミソサザイとは只のチビ鳥ではないことは確かである。

第4に、クリスティーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti [1830-94]) の詩にミソサザイに言及したものがある。「夏」(‘Summer’) である。

Winter is cold-hearted,
 Spring is yea and nay,
 Autumn is a weathercock
 Blown every way :
 Summer days for me
 When every leaf is on its tree ;

When Robin's not a beggar,
 And Jenny Wren's a bride,
 And larks hang singing, singing, singing,
 Over the wheat-fields wide,
 And anchored lilies ride,
 And the pendulum spider
 Swings from side to side⁶⁴⁾

(冬は無情で、
 春は多情、
 秋は風見の
 お天気屋；
 夏こそ我が季節

木には青葉が茂り；

コマドリは飢えから解放され、
 ミソサザイが花嫁となる、
 ヒバリは空高く昇り、歌いに歌う、
 広い麦畑の上で、
 地に咲くユリは風になびき、
 クモは振り子のごとく
 左右に揺れる。)

上の詩は、「ミソサザイはコマドリの妻で、名はジェニー」(“she is Robin’s wife, Jenny”)⁶⁵⁾ という童謡の俗説を踏まえたものである。それというのも、「コマドリもまたミソサザイと同じように雌雄同色同大」であり、「これらの鳥はどちらも繁殖期以外は一羽ずつで行動し、秋冬の季節にはともに人家の近くに出没する習慣を持っている。こうしたことから、昔の人々はくミソサザイは雌ばかりでコマドリは雄ばかりである」と考えた⁶⁶⁾ からである。本邦の英和辞書も“Jenny wren”について、「ミソサザイ (◆子供の用語)」⁶⁷⁾ とか「雌ミソサザイ；(童話などでは一般に) ミソサザイ」⁶⁸⁾ と記述している。“Jenny wren”と言えば、マザーグースである。そこから二つの唄を紹介したい。

5

最初に、紹介するのは「可愛いミソサザイのジェニー」(‘Little Jenny Wren’) という短い唄である。

As a little Jenny Wren,
 Was sitting by the shed.
 She wagged with her tail,

And nodded with her head.

She wagged with her tail,

And nodded with her head.

As little Jenny wren,

Was sitting by the shed.⁶⁹⁾

(可愛いミソサザイのジェニーが

小屋のそばに座っていた時、

尾を振り動かして

頭を下げて頷いた。

尾を振り動かして

頭を下げて頷いた。

可愛いミソサザイのジェニーが

小屋のそばに座っていた時。)

まこと 真に心の温まる童歌であるが、それというのも、英国ではミソサザイは「人家へよく来る」身近な野鳥で、しかも「この上なく小さな」身体で常に敏捷に動いているからであろう。次に紹介するのは「雄コマドリとミソサザイのジェニーの愉快的結婚とピクニックの祝宴」(‘Merry Marriage, and Picnic Dinner of Cock Robin and Jenny Wren’)である。

It was on a merry time,

When Jenny Wren was young,

So neatly as she danced,

And so sweetly as she sung.

Robin Redbreast lost his heart,

He was a gallant bird ;

He doffed his hat to Jenny,

And thus to her he said :

‘My dearest Jenny Wren,
If you will but be mine,
You shall dine on cherry pie,
And drink nice currant wine.

‘I’ll dress you like a goldfinch,
Or like a peacock gay ;
So, if you’ll have me, Jenny,
Let us appoint the day.’

Jenny blushed behind her fan,
And thus declared her mind :
‘Then let it be tomorrow, Bob,
I take your offer kind.

‘Cherry pie is very good,
So is currant wine ;
But I will wear my russet gown
And never dress too fine.

Robin rose up early,
At the break of day,
He flew to Jenny Wren’s house
To sing a roundelay.

He met the Cock and Hen,
And bade the Cock declare
This would be his wedding day,

With Jenny Wren the fair.

The Cock then blew his horn,
 To let the neighbours know,
 This was Robin's wedding day,
 And they might see the show.

The first that came was Parson Rook,
 With spectacles and band ;
 A bible and a prayer book
 He held within his hand.

Then followed him the Lark,
 For he could sweetly sing,
 And he was to be clerk
 At Cock Robin's wedding.

He sang of Robin's love
 For little Jenny Wren ;
 And when he came unto the end,
 Then he began again.

Then came the bride and bridegroom ;
 Quite plainly was she dressed,
 And blushed so much, her cheeks they were
 As red as Robin's breast.

But Robin cheered her up ;
 'My pretty Jen,' said he,
 'We're going to be married,

And contented we shall be.’

The Goldfinch came on next,
To give away the bride ;
The Linnet, being bridesmaid,
Walked by Jenny’s side.

And as she was a-walking,
Said, ‘Upon my word,
I think that your Cock Robin
Is a very pretty bird.’⁷⁰⁾

(ミソサザイのジェニーも、
楽しい娘の時代があったとさ、
若いジェニーはダンス上手に、
歌上手。

そのジェニーに胸赤のコマドリが恋をした、
女性に優しいコマドリは、
うやうやしく帽子を脱いで、
ジェニーに、こう言った。

「愛しい、愛しいミソサザイのジェニー、
もし私の妻になってくれるなら、
美味しいサクランボのパイとスグリの酒を
毎日食事に出しましょう。

おまけに五色のヒワかくジャクのような
綺麗な衣装も着せましょう；

だから私を受け入れてくれるなら、
式の日取りを決めましょう。」

ジェニーは扇子に隠れて顔を赤らめ、
彼女の思いを打ち明けた；
「コマドリさん、それじゃ明日に致しましょう、
貴方の温かいプロポーズお受け致します。

サ克蘭ボのパイもスグリの酒も、
それは、それは有り難い；
でも、衣装は今の朽ち葉色がお気に入り、
立派にすぎる衣装など、着る気は毛頭ありません。」

コマドリは早くも
夜明けに起き出して、
ジェニーの家へと飛んで行き
一曲歌を披露した。

ニワトリ夫婦に会ってから、
皆に伝達よろしくと、亭主に命じて言ったのは
彼が美しいミソサザイのジェニーと、
これから式を挙げるという大ニュース。

そこでオンドリ亭主は角笛吹いて、
隣人たちに告知した、
本日はコマドリの結婚式、
一大見ものが見られるよ。

真っ先に来たのは牧師のミヤマガラス、
紐付きの眼鏡をかけて
聖書と祈禱書を
握りしめ

その次に来たのはヒバリ、
何しろヒバリは良い声で歌えるし、
コマドリの結婚式では
付き人役の予定だったから。

ミソサザイのジュニーに寄せるコマドリの思いを
ヒバリは声高らかに歌った；
そして歌い終わると、
また最初に返って歌い始めた。

ここで新郎新婦の登場だ；
花嫁の衣装は質素そのもの、
彼女は照れに照れて、
頬っぺはコマドリの胸と同じ位に赤かった。

でも、コマドリは花嫁を元気づけて、こう言った；
「可愛いジェンよ、僕たちは、
これから結婚して、
幸せになるのだ」。

その次にゴシキヒワがやって来て、
花嫁に祝いの品を手渡した；

ムネアカヒワは花嫁の付添人となって、
ジェニーの直ぐそばを歩いた。

そして歩きながら、
誓って言った、
「貴女の夫のコマドリは
どこから見てもいい男。」)

では最後に、ミソサザイを唄った短くも美しい詩、Walter de la Mare の‘Jenny Wren’を見てみよう。実に余韻豊かなミソサザイ賛歌である。

Of all the birds that rove and sing,
Near dwellings made for men,
None is so nimble, feat, and trim,
As Jenny Wren.

With pin-point bill, and tail a-cock,
So wildly shrill she cries.
The echoes on his roof-tree knock
And fill the skies.

Never was sweeter seraph hid
Within so small a house...
A tiny, inch-long, eager, ardent,
Feathered mouse.⁷¹⁾

(人家の近くにやって来て
歌を奏でる鳥たちの中で、
ミソサザイのジェニーほど
敏捷で身綺麗な鳥はない。

小っちゃな嘴で、尾をびんと立て、
鋭い高音で激しく鳴き叫ぶ。
その歌声は^{むなぎ}棟木にこだまして
空を満たす。

これほど可愛い翼ある天使が、この^{はにゅう}植生の^{おや}小屋に
身を隠していたなんて、今まで一度もなかったことだ。
一寸法師の体で熱情に溢れる、
羽毛のあるハツカネズミよ。)

では舞台を英国からアメリカに移して、この国の文学に登場するミソサザイ
について見てみよう。

6

「ミソサザイ科は63種、このうち62種はすべて南北アメリカ大陸だけにすみ、わずかに1種だけが、ユーラシア大陸および日本にまで分布している」⁷²⁾という学者の解説が示すように、「(ミソサザイ科の)分布の中心はアメリカ大陸」⁷³⁾である。にもかかわらず、ミソサザイは《本家の地》では、どうも影が薄いようだ。H. D. ソローの『ウォールデン：森の生活』にも登場していない。それというのも、この鳥の花婿である「ロビン」が北米には全く生息していない故か、それとも筆者の浅学菲才の故か。「アメリカ・ロビンが居るじゃないか」、と言う人が居るかも知れない。でも、この鳥はロビンの呼び名を有するとはいえ、英国や我が国の「ロビン」(コマドリ)とは全く異なる別種の鳥、コマツグミである。だが、探せば居ない訳ではない。最初に、ホイットマンの詩集：『草の葉』にミソサザイに言及している箇所がある。

I believe a leaf of grass is no less than the journey work of the stars,

And the pismire is equally perfect, and a grain of sand, and the egg
of the wren

And the tree-toad is a chef-d'oeuvre for the highest,

And the running blackberry would adorn the parlors of heaven,

And the narrowest hinge in my hand puts to scorn all machinery,

And the cow crunching with depress'd head surpasses any statue,

And a mouse is miracle enough to stagger sextillions of infidels.⁷⁴⁾

「ぼくは信じている、一枚の草の葉も星辰^{せいしん}の1日の運行に劣らぬことを、
そして蟻も同様に完璧^{かんぺき}であり、ひと粒の砂、みそさざいの卵も完璧である
ことを、

そして雨蛙は至高者の目にも耐えうる傑作であり、

そしてつるを伝う木^{き いちご}苺は天国の客間を飾るにふさわしく、

そしてぼくの手を組み立てている一番小さな蝶^{ちょうつがい} 番にくらべても世の凡百
の機械が下らなく思えてくることを、

そして頭を垂れて音たてながら草を噛む雌牛にはどんな彫像もかなわない
ことを、

そして一匹のはつか鼠^{ねずみ}は雲霞^{うん か}のごとき不信心者の大群を啞然たらしめるほ
どの奇跡だということを。」⁷⁵⁾

詩人は大自然の中で《人間の手にならざる最小の物》として、「一枚の草の葉」、「蟻」、「一粒の砂」と共に、ミソサザイを「最小クラスの鳥」の代表と見なして称えている。たとえ表の舞台に登場するのは「卵」だけとはいえ、ミソサザイには名誉なことだ。この名鳥は、何よりも見た目の小ささの故に、アメリカでも一際目立つようである。

次に、アメリカの海洋学者でエッセイストのレイチェル・カーソン (Rachel L. Carson [1907-64]) は『沈黙の春』(1962)の中でミソサザイに言及して次のように述べている。

There was a strange stillness. The birds, for example—Where had they gone? Many people spoke of them, puzzled and disturbed. The feeding stations in the backyards were deserted. The few birds seen anywhere were moribund; they trembled violently and could not fly. It was a spring without voices. On the mornings that had once throbbed with the dawn chorus of robins, catbirds, doves, jays, wrens, and scores of other bird voices there was now no sound; only silence lay over the fields and woods and marsh.⁷⁶⁾

「自然は、沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は、からっぽだった。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶるからだをふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、コマドリ、スグロマネシツグミ、ハト、カケス、ミソサザイの鳴き声で春の夜は明ける。そのほかいろんな鳥の鳴き声がひびきわたる。だが、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地——みな黙りこくっている。」⁷⁷⁾

『沈黙の春』とは農薬による環境汚染を告発し、現代のエコロジー運動の啓発に多大の貢献を果たした不朽の名著である。出版されるや否や、世界的なベスト・セラーとなり、1964年に我が国にも紹介され、今も老若男女を問わず幅広く読まれている。アメリカ人によって書かれた啓蒙書の中で、書名・内容ともに世界の人口に膾炙している点から言えば、この書の右に出るものはそう多くはあるまい。この世界的名著の中でミソサザイは、一応アメリカの「春告げ鳥」の「取り（真打ち）」を務めている。これまたミソサザイには名誉なことである。

最後に、セオドーア・レットキ (Theodore Roethke) [1908-63] の教え子を悼む詩：「ジェーンに寄せる哀歌：落馬して逝きし教え子に」から一部を紹介する。

あの子は、さながら風の方向に尾をさしむけて、嬉々として囀るミソサザイ。

その歌は小枝をふるわせ、

影^{かげ}まで、その歌に唱和して、

木の葉がそよぎ、あの子にキスをした。

そして、白い谷間の

薔薇^{ばら}の下では

土も歌っていた。⁷⁸⁾

以上のように、ミソサザイを唄うアメリカの詩人や文人は少ない。でも、この鳥はアメリカでも只のチビ鳥ではないことだけは確かである。それが証拠に、ミソサザイはアメリカの1州（サウス・カロライナ州）を象徴する「州鳥」でもある。では最後に、我が国の文芸に登場するミソサザイについて見てみよう。

7

最初に、神話から。ミソサザイは『古事記』の中で、女鳥王^{め どりのみこ}をめぐる仁徳天皇と速総別王^{はやぶさわけのみこ}の軋轢物語：「女鳥王と速総別王の反逆」に顔を出す。女鳥王^{め だりのみこ}は仁徳天皇から求婚されるが、彼の妻（側室）になることを厭い、秘かに天皇の弟、速総別王^{はやぶさわけのみこ}と結婚する。そして、夫に「仁徳天皇を殺して、貴方が新天皇になりなさい」と反逆を勧めて次のように歌う：「雲雀は^{ひばり}天^{あま}に翔る 高行くや^{はやぶさわけ}速総別^{ささぎ} 鷯^{はやぶさ}取らさね」⁷⁹⁾。ここで「速総別」とは鳥のハヤブサ[隼]を、「鷯^{ささぎ}」（ミソサザイ）とは仁徳天皇を指すことが分かれば、歌の意味は自ずと明らかである。それは「雲雀は天を飛んで行く。それよりも高い天を飛んで行く、隼^{はやぶさ}という名をもった御子よ、どうか、鷯^{ささぎ} [仁徳天皇] を殺して下さい」⁸⁰⁾である。

ミソサザイが仁徳天皇を意味するのは、この天皇の実名は^{おおささぎ}大鷯^{おお}、別名は^{ささぎのみこと}大鷯尊^{ささぎのみこと}だからである。では、どうして「最小クラスの鳥」であるミソサザイ

の名が、天皇の名前に付けられているのか。その答えは『日本書紀』にある。この歴史書によれば、「仁徳帝が生まれた時、産殿にミミズクが飛び込んだ。次の日応神天皇は大臣の武内宿禰おとど たけうちのみくねを呼んで前日のことを話した。宿禰は、それはとても吉祥だと答えた。そして、自分の家にもおなじ日に子が生まれ、参殿にミソサザイが入ってきたといった。応神天皇は瑞兆を喜び、おたがいの鳥の名を交換し合って子に与えたのである。仁徳帝は大鷦鷯皇子、武内宿禰の子は木菟宿禰みみずくのすくねと名づけられた」⁸¹⁾という。だとすると、ミソサザイは我が国でも古の神話の時代から瑞兆の鳥、吉鳥と見なされていたことは確かである。我が国の俗信：「元旦に鷦鷯を見るとその年は縁起がよい」⁸²⁾は、その証左である。では次に、ミソサザイの登場する古今の俳句を列举してみよう。

- ①「笹垣のどちらに啼ぞみそさざい」 (去来)⁸³⁾
- ②「みそさざいちつというても日の暮るる」 (一茶)⁸⁴⁾
- ③「岩々の影のこゑなる鷦鷯」 (飯田龍太)⁸⁵⁾
- ④「みそさざい声ひびく岩の滴れり」 (志村春藻)⁸⁶⁾
- ⑤「物あればすなはち隠るみそさざい」 (正岡子規)⁸⁷⁾
- ⑥「干策の動いてゐるは三十三才」 (高浜虚子)⁸⁸⁾
- ⑦「鷦鷯来るや薪割なたの鉈なたの先」 (松根東洋城)⁸⁹⁾
- ⑧「庭におく深雪の石にみそさざい」 (飯田蛇笏)⁹⁰⁾
- ⑨「三十三才チョロと落葉を返し飛ぶ」 (河東碧梧桐)⁹¹⁾
- ⑩「凍雪や戸口を走る三十三才」 (村上鬼城)⁹²⁾
- ⑪「世に遠きことのごとしや鷦鷯」 (加藤楸邨)⁹³⁾
- ⑫「歳月の暗き沼より鷦鷯」 (森澄雄)⁹⁴⁾
- ⑬「ひっそりと暮らせばみそさざい」 (種田山頭火)⁹⁵⁾

また和歌にも「冬庭を動くがゆゑに目に見れど居り処おとどのわかぬ鷦鷯ささぎちひさし」(中村憲吉)⁹⁶⁾がある。いずれの歌も我が国では「深い山中」⁹⁷⁾に住み、「活動

的に常に動いている」見るからに小さくて用心深い鳴き鳥、ミソサザイの特性を見事に活写している。俳人の真壁仁氏は「ミソサザイは藪くぐりの名人で…生垣の茂みにちらと焦げ茶色の小さな姿が見えたかと思うと、すぐどこかへ行ってしまふ。枝移りなどというものではない。まさに藪くぐりなのだ。チュッチュッと地鳴きで居所は知れるが、ひとつ所にじっとしてはいない。その動きの敏捷さは驚くばかりである」^[98]と述べている。更に、その「さえずりは明るくすばらしい声で複雑」^[99]というから、感性豊かな文人の耳目を集めるのも尤もである。

上のように、ミソサザイは「最小クラスの鳥」の中では最も目立つ有名鳥である。その故であろうか、東洋には「鷓鴣林に巣くうも一枝に過ぎず」や「鷓鴣の巢を梅が枝にかけろ」という格言がある。前者は「鷓鴣が深い林に巣を作っても、必要なのはたった一枝にすぎない。人はその身分、力量に応じて現状に満足すべきであるというたとえ」^[100] 後者は「〈ミソサザイ〉は、木の枝に巣をつくらないところから、いつのことになるかわからないこと、実現しがたいことをいう」^[101]の意である。また格言のみならず、童話の世界でも名脇役を務め、子供たちに明るいイメージを振りまいている。宮沢賢治の作品は、その代表である。

この作家は、『十月の末』で「〈ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン〉。みそさざいどもは、とんだりはねたり、柳の木の中かで、じつにおもしろそうにやっています」^[102]と、また未完の童話：『学者アラムハラドの見た着物』では「うぐひすならば春にはっきり啼く。みそさざいならばからだをうごかすたびにもうきつと啼いてゐるのだ。これらの鳥のたくさん啼いている林の中へ行けばまるで雨が降ってゐるやうだ」^[103]と述べている。それにしても、宮沢賢治の作品には多くの野鳥が登場し、『やまなし』のカワセミのごとく実に重要な役を演じているのは注目に値する。

では最後に、アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』を通してミソサザイのお復習^{さらい}をしたい。この事典によれば、ミソサザイに関する説

明は10項目。具体的に言えば、その主要部は次の如し。①は「(金色のトサカの) ミソサザイは、「旧年」の1年を2人で分ける王である(オランダでは「冬の王)」……**a** 「ミソサザイ、ミソサザイ、鳥の王、聖ステパノの日にハリエニシダの中で捕らえられた」……**c** 別の童謡では、ミソサザイは、「コマドリ」の妻ジェニィになる」である。一読して自明のように、ここでもミソサザイとククイタダキとの混同が見られる。「金色のトサカ」があるのはククイタダキである。換言すれば、ククイタダキはミソサザイの一族と見なされているのだ。

②は「母性愛、勇敢を表す」、③は「色欲を表す」である。④は「予言をする……**b** ドルイドの鳥」で、⑤は「死を表す。**a** Cock Robinの葬儀のとき、ミソサザイが棺のおおいをもっている。**b** コマドリとミソサザイは埋葬されない死者に葉や花をかけてやる」である。⑥は「慰め」、⑦は「身体が小さいことを表す」。⑧は「ブレイク [William Blake]: He who shall hurt the little wren / Shall never be beloved by men. かわいいミソサザイをいためる者は人々に愛されることはない」、⑨は省略。⑩は「《民間伝承》ミソサザイの卵をとるのはとても不吉」¹⁰⁴⁾ である。

この中で、①の「聖ステパノの日に捕殺された」のは、古のケルトではキリスト教の布教を阻害するほどミソサザイが「ドルイドの聖鳥」として崇められていたため；③の「色欲」はカッコウの托卵による種としての絶滅を避けるため、であることは既にみた。また⑤の「死」は、換言すれば、死者に対する優しさを意味している。と見てくれば、ミソサザイにまつわるイメージ・シンボルは圧倒的に「明」そのものとなる。

それも道理。何しろミソサザイは、「最も英国的な(鳥)」¹⁰⁵⁾で「英国人にとって特別親しまれ、英国の国鳥になっている」¹⁰⁶⁾ ロビン [コマドリ] の愛妻なのだから。総括すれば、洋の東西を問わず、ミソサザイとは「知恵と力と幸運を持った鳥」と言える。それにしても、見た目には「この上なく小さな」鳥なのに、ミソサザイ学の奥は何と深いことか。ただただ驚くばかりである。

注

- 1) 中野泰敬『四季で探す野鳥ハンドブック』（新星出版社，1999），p. 76. Cf. 高野信二・叶内拓哉『フィールド図鑑：野鳥小図鑑』（東海大学出版会，1984），p. 180：「日本の鳥の中でいちばんちいさい」。
- 2) 各鳥の大きさについては，同上の『フィールド図鑑：野鳥小図鑑』参照。
- 3) 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修，成田成寿編集『英語歳時記』（研究社，1997），p. 821.
- 4) 同上，pp. 168-9.
- 5) 中野泰敬『四季で探す野鳥ハンドブック』，p. 74-6 参照。
- 6) 中村登流・行田哲夫『野鳥検索小図鑑』（講談社，1984），p. 141.
- 7) 中西悟堂『定本野鳥気1：野鳥と共に』（春秋社，1971），p. 219.
- 8) 志村英雄・山形則男・柚木修「バードウォッチングのための市街地・野山・水辺の鳥 186 種：野鳥ガイドブック」（永岡書店，1989），p. 70.
- 9) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』77号（朝日新聞社，1972），p. 14.
- 10) 同上
- 11) 吉田金彦編著『語源辞典：動物編』（東京堂出版，2001），pp. 236-7.
- 12) *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Štěpánek (Spring Books, 1965), p. 122.
- 13) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』（河出文庫，1999），pp. 247-8.
- 14) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』77号，pp. 6-13.
- 15) 日本野鳥の会監修『漢字百話 鳥の部：鳥・とり事典』（大修館書店，1989），p. 84.
- 16) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』77号，p. 14.
- 17) 同上
- 18) 『広辞苑』第5版（岩波書店，CD-ROM 版，1998）。以下『広辞苑』からの引用は全てこの版による。
- 19) 同上
- 20) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne* (Arrowsmith, 1924), p. 95.
- 21) 同上，p. 107.
- 22) 同上，p. 114.
- 23) W. H. Hudson, *Birds in London* (Longmans & CO, 1898), pp. 320-1.
- 24) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』（大修館書店，1982），p. 52.
- 25) 『シンベリン』小田島雄二訳，『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』（新潮社，2003）。以下シェイクスピア作品の原文・日本語訳は全てこの版による。
- 26) 小田島雄二訳
- 27) 小田島雄二訳

- 28) 小田島雄二訳
- 29) 小田島雄二訳
- 30) 木下順二訳
- 31) 小田島雄二訳
- 32) 小田島雄二訳
- 33) 小田島雄二訳
- 34) 小田島雄二訳
- 35) 『新英和大辞典（第6版）』（研究社，CD-ROM版，1998）参照。以下研究社『新英和大辞典』からの引用は全てこの版による。
- 36) *OED*, CD-ROM version 3.00 (Oxford University Press, 2002).
- 37) ジェイムズ・E・ハーディング『シェイクスピアの鳥類学』関本榮一・高橋昭三訳（博品社，1996），p. 172.
- 38) James E. Harting, *The Ornithology of Shakespeare* (Gresham Books, 1978), p. 144.
- 39) ジャン・シュヴァリエ，アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』金光仁三郎・熊沢一衛・小伊戸光彦・白井泰隆・山下誠・山辺雅彦共訳，（大修館書店，1996），p. 946.
- 40) ギルバート・ホワイ特『セルボーンの博物誌』山内義雄訳（講談社学術文庫，1992），p. 180.
- 41) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne* (Arrowsmith, 1924), p. 113.
- 42) 日本野鳥の会監修『漢字百話 鳥の部：鳥・とり事典』（大修館書店，1989），p. 66.
- 43) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹，荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳（大修館書店，1984），p. 702.
- 44) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 2004), p. 620.
- 45) 『イソップ寓話集』中務哲郎訳（岩波文庫，1999），p. 326.
- 46) *Aesop's Fables*, A new translation by Laura Gibbs (Oxford University Press [World's Classics], 2002) from *Aesopica: Aesop's Fables in English, Latin & Greek* の e-text による。
- 47) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第4巻：[鳥類]』（平凡社，1987），p. 312.
- 48) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』（河出文庫，1999），p. 249.
- 49) 日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』（三弥井書店，2004），pp. 171-2.
- 50) 同上，pp. 174-7.
- 51) 柳田国男『日本の昔話』（新潮文庫，2004），pp. 24-5.
- 52) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』，p. 249.
- 53) 中川芳太郎『英文学風物誌』（研究社，1957），p. 698.
- 54) *The White Devil* by John Webster (Project Gutenberg, 2004) の e-text による。
- 55) ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』井上れい子訳（成美堂，1995），p. 62.

- 56) *All for Love* by John Dryden (Project Gutenberg, 2000) の e-text による。
- 57) *Poems by William Blake* (1911), selected with an introduction by Alice Meynell (Kessinger Publishing Rare Reprints, 2008), p. 145.
- 58) *Songs of Innocence and Experience* by William Blake (Project Gutenberg, 1999) の e-text による。
- 59) 『ブレイク詩集：世界の詩 55』寿岳文章訳（彌生書房，昭和 49），pp. 66-7.
- 60) E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』加島祥造主幹，鮎沢乗光編集，鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木愼一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子共訳（大修館書店，1989），p. 1875.
- 61) 加藤憲市『英文学動物話』（松柏社，1964），p. 139.
- 62) 荒俣宏「ミソサザイ」，『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社，CD-ROM 版，1998）。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
- 63) 青山吉信「ドルイド」，『世界大百科事典』
- 64) *Poems by Christina Georgina Rossetti* (Project Gutenberg, 2006) の e-text による。
- 65) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 620.
- 66) 鈴木一博『マザー・グースの誕生』（教養文庫，1989），p. 143.
- 67) 『ジーニアス英和・和英辞典』（大修館書店，CD-ROM 版，1999）参照。
- 68) 『新英和大辞典（第 6 版）』参照。
- 69) 鈴木一博『マザー・グースの誕生』（教養文庫，1989），p. 142.
- 70) Iona and Peter Opie, *The Puffin Book of Nursery Rhymes* (Penguin Books, 1963), pp. 36-8.
- 71) *On Wings of Song: Poems about Birds*, selected and edited by J. D. McClatchy (Alfred A. Knopf, 2000), p. 21.
- 72) 『朝日＝ラールス世界動物百科（鳥類）』77 号，p. 6.
- 73) 斉藤隆史「ミソサザイ」，『世界大百科事典』
- 74) *Leaves of Grass* by Walt Whitman (Project Gutenberg, 1998) の e-text による。
- 75) 『ホイットマン詩集：草の葉（上）』鍋島能弘・酒本雅之訳（岩波文庫，1973），pp. 163-4.
- 76) Rachel Carson, *Silent Spring* (Houghton Mifflin, 1962), p. 2.
- 77) レイチェル・カーソン『沈黙の春：生と死の妙薬』青樹梁一訳（新潮文庫，1974），p. 12.
- 78) 桜井信夫編著『はじめてであう世界の名詩：北アメリカの名詩』（あすなろ書房，1994），pp. 22-3.
- 79) 倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫，2000），p. 165.
- 80) 梅原猛『古事記』（学研 M 文庫，2001），p. 181.
- 81) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』，p. 249.
- 82) 同上
- 83) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』（成美堂出版，2005），

- p. 291.
- 84) 同上
- 85) 同上
- 86) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記3：夏の鳥』（学習研究社，1983），p. 147.
- 87) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』，p. 291.
- 88) 同上
- 89) 同上
- 90) 同上
- 91) 風信子著・中野泰敬・戸塚学写真『俳句と詩歌であるく鳥のくに』（文一総合出版，2008），p. 111.
- 92) 同上
- 93) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』，p. 291.
- 94) 同上
- 95) 同上
- 96) 風信子著・中野泰敬・戸塚学写真『俳句と詩歌であるく鳥のくに』，p. 111.
- 97) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記1：春の鳥』（学習研究社，1984），p. 130.
- 98) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記1：春の鳥』，p. 129.
- 99) 中村登流・行田哲夫『野鳥検索小図鑑：山野の鳥』（講談社，1984），p. 141.
- 100) 『国語大辞典（新装版）』（Microsoft/Shogakukan Bookshelf，CD-ROM 版，1988）。
- 101) 同上
- 102) 「十月の末」，『新修 宮沢賢治全集 第八巻』（筑摩書房，1988），p. 267.
- 103) 「学者アラムハラドの見た着物」，『新修 宮沢賢治全集 第十巻』（筑摩書房，1989），pp. 176-7.
- 104) 10 項目に関しては，アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，pp. 701-2 参照。
- 105) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』（大修館書店，1982），p. 2.
- 106) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 別巻1：世界の鳥 ユーラシア／アフリカ』（小学館，1985），p. 153.